

大相撲における外国出身力士の受容過程

——高見山・小錦のヒール性から考察する

日本相撲協会とメディアの体質

20191124 松田大蔵

日本の国技である大相撲で、外国出身力士が「ヒール」扱いされてきた、という見方が日本社会で共有されている。本研究では、それが事実なのか、事実ならばその根拠は何なのか、加えて彼らが現代に至るまで相撲界でどのように受容されていったかを、外国出身力士のパイオニアにあたる高見山・小錦らに対する報道から調査・検討する。

ベースボール・マガジン社の雑誌「相撲」上での報道を約34年間分調査した結果、外国出身力士への批判的な言説はごく限られたものであったこと、批判の内容は出自ではなく「個々人の行動」を指摘するものであったこと、彼らを好意的に評価する基準として「日本人らしさ」が大きなウェイトを占めていること、などが明らかになった。日本相撲協会が「外国出身者の日本人化」を推進することは差別と取られる恐れもあるが、一方で、相撲界における風紀や秩序の維持において一定の効果を生んでいることも分かった。これらの研究から得られた知見は、大相撲のみならず、日本社会が直面する外国人労働者問題の改善にも応用が利くと考えられる。